

祈りは聞かれる

【聖書】出エジプト記5章1～5節、

その後、モーセとアロンはファラオのもとに出かけて行き、言った。「イスラエルの 神、主がこう言われました。『わたしの民を去らせて、荒れ野でわたしのために祭りを 行わせなさい』と。」ファラオは、「主とは一体何者なのか。どうして、その言うこと をわたしが聞いて、イスラエルを去らせねばならないのか。わたしは主など知らないし、イスラエルを去らせはしない」と答えた。二人は言った。「ヘブライ人の神がわたしたち ちに出現されました。どうか、三日の道のりを荒れ野に行かせて、わたしたちの神、主に犠牲をささげさせてください。そうしないと、神はきっと疫病か剣でわたしたちを滅ぼされるでしょう。」エジプト王は彼らに命じた。「モーセとアロン、お前たちはなぜ彼らを仕事から引き 離そうとするのだ。お前たちも自分の労働に戻るがよい。」ファラオは更に、言った。「この国にいる者の数が増えているのに、お前たちは彼らに労働をやめさせようとするのか。」

22節～6章1節

モーセは主のもとに帰って、訴えた。「わが主よ。あなたはなぜ、この民に災いをくだされるのですか。わたしを遣わされたのは、一体なぜですか。わたしがあなたの御名によって語るため、ファラオのもとに行ってから、彼はますますこの民を苦しめています。それなのに、あなたは御自分の民を全く救い出そうとされません。」主はモーセに言われた。「今や、あなたは、わたしがファラオにすることを見ろであろう。わたしの強い手によって、ファラオはついに彼らを去らせる。わたしの強い手によって、ついに彼らを国から追い出すようになる。」

【序】神学校週間にあたり

私たちの川越教会も30周年記念礼拝を期に、いよいよ新しい歩みを始めることになりました。私も85才で引退しますので、新しい牧師招聘にも取り組んでいただかなければなりません。神学校週間にあたり、西南神学部、東京バプテスト神学校、九州バプテスト神学校や奨学金募集を担当する全国壮年会連合からの文書が送られてきています。教師や在校生の証を読み、牧師、教会奉仕者になろうとしている方の信仰や人柄がわかり、私たちの祈りも具体的になりますね。そして川越教会にはどのような牧師が来てくれるだろうかという思いになります。

西南の神学部報に広島教会播磨牧師の卒業礼拝説教が記載されています。彼は 23 才で卒業し、骨を埋める決意をもって或る教会に赴任しました。しかし二年後に執事全員から、牧師が辞めるか、自分たちが教会を辞めるかと問い詰められて、辞任したそうです。自分の無力さに身動き取れず、アルバイトしながらうごめいていると、半年後に鹿児島教会から招聘の打診がありました。

「牧師として通用しなかった人間です」。「挫折して傷を負っているところから聖書を読んで説教してください。自分は出来る、大丈夫だと思っているところからではなく、傷を負っているところから牧会してください」。そして鹿児島教会で大切にされ、愛され、癒されて、立ち上がることが出来たそうです。身につまされる証ですね。私の若い日々が甦ってきます。

教会は牧師によって、いろいろと傷つきます。でも牧師は教会によって育てられていくのです。牧師と一緒に成長していく教会でありたいですね。川越教会も、これまでの歴史から学ぶべき所を学び直して、先ず自分たちがどのような教会を目指していくかを十分に語り合い、考え合い、祈り合い、それから牧師の人選に入っては如何でしょうか。今学んでいる神学生のために祈り、奨学金献金をささげていきましょう。

[1] 救いのみ業の第一歩

さて今日は出エジプト記第5回目の学びです。アブラハムを始祖とするイスラエルは三代目ヤコブの晩年に、世界的な大飢饉から、エジプトに移住を余儀なくされました。しかしエジプトの国の一番東の端、ナイル川の流域に住み着くことが出来たので、430年後には70人のヤコブ一族が、成人男子だけでも60万、女性や未成年者を含めると、百数十万人の民族集団に成長しました。

しかし自分の国の中にカナンから移住して来たイスラエルの民が、これほど大きな集団となり更に増え続ける状況は、エジプト王にとっては国家的な危険と映りました。もし東方から敵が攻めて来たら、ナイル川の流域が戦場になります。そしてそこに住むイスラエルの人々が敵側についたら大変です。王朝はイスラエルに好意的なセム系から、エジプト土着の民ハム系の王朝に代わっていましたが、なおさらヘブライ人に対する王の警戒心と恐れが募りました。

そこでイスラエルを弱体化するために、重労働を課して虐待を始めたのです。しかしイスラエルの民は、あらゆる苛酷な労働・虐待にもへこたれず、増え広がっていきます。王は遂に「ヘブライ人の男の赤ん坊はすぐにナイル川に放り込め」と命じました。ここで、後にイスラエル民族の大集団を、エジプトから脱出させてカナンの地に戻らせた指導者モーセが、歴史に登場します。彼は生まれて3ヶ月秘かに育てられてから、防水加工をしたパピルスの籠に入れられてナイル川の葦の陰に置かれました。すると水浴びに来たエジプト王の王女に拾われて彼女の養子になり、王宮で育てられることとなります。彼は王族の一人として最高の教育を受けて成人しました。

しかしモーセの心には、自分がヘブライ人の生まれであるという自覚がありました。40才の時に王宮の外で、ヘブライ人がエジプト人から虐待されている現場を目の当たりにして、そのエジプト人を打ち殺してしまいました。そしてその翌日、ヘブライ人同士がけんかしていたので仲裁に入ったら、「あのエジプト人を殺したようにするのか」と言い返されて、自分がヘブライ人からも受け入れられていないことを、思い知らされたのでした。

国王の怒りをかったモーセは、砂漠の彼方遠く東のシナイ半島を更に越えたミデアンの地まで逃げて行き、祭司の娘と結婚して羊飼い暮らしを送ります。一方ヘブライ人は、年ごとに強まるエジプト王の奴隷扱いにうめき、救いを求めて祈り続けました。神さまはその祈りに応えて、救いのみ業を始めて下さいました。そして先ず、モーセを神の使者としてお召しになったのです。

羊の群れを追って神の山ホレブに来たモーセは、柴が火に燃えているのに燃え尽きない不思議な光景に出会いました。不思議に思って近づいて来た彼は、神の声を聞きます。「モーセよ、足から履物を脱ぎなさい。ここは聖なる土地である。」「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。

「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを つぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地に彼らを導き上る。」「見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」(3:7~10)

モーセは驚き、恐れ、尻込みして断り続けました。当然です。彼もかつては正義感に駆られてヘブライ人を助けてきました。しかしエジプト王の怒りを買って、ヘブライ人からも仲間として迎えてもらえず、挫折しました。エジプト人の間にも、ヘブライ人の間にも居場所を持たない孤立無援の自分。遠くミデアンの地に逃げて来て、羊飼いの生活を送って40年。80才の老境に達していたのです。

「私の生涯はこれでおしまいです。今更エジプトに戻って、神だと自認している権力者ファラオの前に立ち、奴隷集団を解放せよと交渉出来るでしょうか。ヘブライ人自体が、この私を彼らの代表者として支持してくれるでしょうか。とんでもないことです」(牧師も教会員皆さんの支持がなければ勤まりません)。

しかし神さまは、神の力を発揮する杖を与え、口の重いモーセに代わって兄アロンをスポークスマンとして、2人一緒に王と交渉するようにと手筈を整えて、モーセを説得してしまわれました。モーセは遂に妻子を連れて、兄アロンとも出会って、エジプトに戻って行きました。

[2] なかなか聞かれない祈り

さて今日の聖書の箇所は、エジプト王との第一回の交渉の場面です。皆さんは分級でいろいろと学ばれたことと思いますが、私はこの箇所から「祈りとは」という問いへの答を学び取りました。それをお取次ぎさせていただきます。

神さまを信じる者は事あるごとに祈ります。エジプトで苛酷な奴隷生活を余儀なくされたイスラエルの民も、悲痛な叫びを上げて、救いを祈り求めました。では神さまは彼らの祈りに、どのように答えてくださったのでしょうか。神さまの応答は、モーセを使者に選んで、エジプト王と交渉させることでした。

「見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエル

の人々をエジプトから連れ出すのだ。」(3:7~10)

そこでモーセとアロンは、エジプト国王ファラオの前に立って言いました。「イスラエルの神、主がこう言われました。『わたしの民を去らせて、荒れ野で わたしのために祭りを行わせなさい』と。」

案の定、ファラオは全く聞く耳を持ちません。「主とは一体何者なのか。どうして、その言うことをわたしが聞いて、イスラエルを去らせねばならないのか。わたしは主など知らないし、イスラエルを去らせはしない」。モーセは、神さまを主と言っています。「主」とは主権と支配と権威を表わす言葉です。するとこの主の前に立つモーセは僕です。へりくだって絶対的に服従すべき僕なのです。その神を主と呼ぶイスラエルの民も、神さまの僕です。ご命令に従って荒れ野に出て行き、祭(礼拝)を行わなければなりません。

クリスマスでよく歌われるヘンデルのメサイアにまつわるエピソードが浮かんできます。ロンドンで初めて演奏された時、ハレルヤコーラスで、諸王の王、主の主(The King of Kings, The Lord of Lords)と歌われるや、イギリスの国王が思わず起立したと言われていますね。主という言葉にはそれほどの畏れと権威があるのですね。

ところがファラオにはそのような神に対する畏れがありませんでした。国王である自分こそがエジプトの主、絶対的支配者であり、全国民は自分に服従しなければならない僕だと、主張したのです。そして「怠け者。さぼるな。もっと働け」と苛酷な労働を更に増やす命令を下したのです。

イスラエルの民は悲鳴をあげてモーセに抗議しました。モーセも神に訴えました。「わが主よ。あなたはなぜ、この民に災いをくだすのですか。わたしを遣わされたのは、一体なぜですか。わたしがあなたの御名によって語るため、ファラオのもとに行ってから、彼はますますこの民を苦しめています。それなのに、あなたは御自分の民を全く救い出そうとされません。」

しかし神さまはモーセにお答になりました。「今や、あなたは、わたしがファラオにすることを見るであろう。わたしの強い手によって、ファラオはついに彼らを去らせる。わたしの強い手によって、ついに彼らを国から追い出すようになる」。皆さん、神さまのこの答を私たちはしっかりと心に留めておかなければなりません。

こうしてモーセとファラオとの交渉が 10 回も繰り返され、遂にファラオが主なる神に屈服するドラマが 15 章まで続きます。

[3] 神の答

イスラエルの民は、自分たちを奴隷扱いするエジプト人の苛酷な扱いから、助けを祈り求めました。少しでも楽なエジプト生活を望んだのです。しかしそれでは一時しのぎの解決です。神さまは彼らをエジプトから脱出させてカナンの地に戻すという根本的な解決を考えておられました。です

から荒れ野に三日の道のりで行って礼拝するという提案をモーセにさせたのです。旅だけで往復六日、祭の日程も加えると10日以上の間、百数十万人の奴隷の民を遊ばせることとなります。国王として許可できるわけありません。

神さまは、モーセによって蛙、ぶよ、あぶ、疫病、腫物、雹、いなご、暗闇等の災害を次々と起こしましたが、ファラオは許しません。しかしエジプト中の初子が皆死ぬという事態が起こり、国王も我が子を失うに至って、遂に許可を出しました。それでも百数十万人の奴隷を失う損失に気付いたファラオは、精鋭の軍隊を追跡させましたが、葦の海で溺れ死なせて、失ってしまいました。こうして神さまは「主とは一体何者なのか」とうそぶいたエジプト王に、「諸王の王、主の主」なるお方であることを、はっきりと示されたのでした。

私たちはとにかく、目先の困難の改善を祈り求めがちです。そして祈っても聞かれない、聞かれないというろたえます。でも神さまは、先の先を見て、最善の解決を与えようとされます。ですから祈りが聞かれない時こそ、祈り続けなければなりません。すると私たちの祈りが変えられていきます。この導きが信仰の恵みではないでしょうか。私たちの信じている神さまは、このように自分こそ神だとうそぶく国王をも屈服させて、私たちの祈りを聞いて下さる強い手を持つ全能の神さまなのですから。

しかし私はここで、苛酷な奴隷扱いに苦しむイスラエルの民の祈りを聞いて下さるのに、神さまは、どうしてこのように手間ひまをかけられたのだろうかという疑問を持ちました。モーセがファラオと交渉し始めたら、イスラエルの民の苦しみは一層悪くなりました。祈っても直ぐには聞いていただけない。事態はかえって悪くなる。それは神さまが根本的な解決を目指したからでした。

それにしても、国王の傲慢さのために、大勢の者が色々な災害を受けて苦しみ、命すら失ったのです。直接国王だけを懲らしめて、いち早くイスラエルを救い出して下さっても良かったのに、という疑問です。これはどうしたことでしょうか？ 皆さんも、お考え頂きたいと思います。

[結] 愛するがゆえに

創世記の最後 50 章のヨセフの言葉が浮かんできました。父ヤコブが死んだ後で、ヨセフを妬んで奴隷に売り飛ばした兄たちが、ヨセフの復讐を恐れて脅えました。その姿にヨセフは涙を流して語りました。「わたしが神に代わることができましようか。あなたがたは私に悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために今日のようにしてくださったのです」(19～20)。

「私たちのたくらむ悪を善に変えて、多くの民の命を救おうとされる神さま」。神は全知全能のお方であると同時に、悪を善に変えて多くの民の命を救おうとされる愛の神さまなのですね。神さまは、70 人のヤコブ一族だけでなく多くの民の救いまで考えて、先ずヨセフをエジプトに遣わされたのでした。

イエス・キリストは、人々から尊敬されている老令の学者ニコデモにお語りになりました。「神はそ

の独り子をお与えになるほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである」(ヨハネ 3:16)。

今日はこれから主の晩餐式を守ります。妬みから主を十字架にかけようとしたユダヤ教指導者たち、自己保身から十字架刑執行を命じた総督ピラト、付和雷同する群衆、逃げ散って姿をくらます弟子たち。このような人間模様の渦巻く中で、自ら進んで十字架につけられ「父よ、彼らをお赦しください」と祈りつつ、すべての人の罪を贖う死を遂げて下さった主イエス。この御子イエス・キリストの十字架によって、ご自身の愛を現された天の父なる神さま。

私は今日の聖書からも、エジプト王をあっさり切り捨ててしまわずに、何とか悔い改めに導こうとされた愛の神さまを見出しました。これから讚美歌 538 番を歌います。宗教改革を進めたマルチン・ルターの軍歌です。2節「いかに 強くともいかでか頼まん やがては朽つべき人の力を われと共に戦いたもう イエス君こそ 万軍の主なるあまつ大神」。

万軍の主、全能の主なる神さまが、イエス・キリストとなってその愛を現して下さいました。神さまの強い手は、私と共にいてくださるこの救い主イエス・キリストを通して、愛の業として働いて下さるのです。その神さまが私たちの祈りにも、最善の恵みをもって答えて下さるのです。祈りが直ぐに聞かれなくても、私だけでなく、多くの人を救おうとされる愛の故であると信じて、祈り 続けて参りましょう。救い主イエス・キリストが私と共にいて下さるのですから、祈りは必ず聞かれるのです。

祈ります。全能の主なる神さま。イエス・キリストとなってご自身を現して下さった愛の神さま。あなたの御名を賛美します。あなたは、誇りたかぶるエジプト王をも見捨てずに、悔い改めさせようと心をお砕きになりました。そのために多くの者が苦しみましたが、でもあなたは愛の主であり続けようとされました。私たちも自分の祈りを捧げつつも、最善の答えをあなたから頂けることを信じて、あなたの答を待つ者にして下さい。そして貴方が示される導きと指示に 喜んで従う者にして下さい。この祈りを、主イエスさまの御名によってお祈り します。 アーメン